暗記は特訓で

「奥村君」
「へーい」
適当な返事をして前に出る。返却された小テストの用紙に赤字で書き入れられた点数を見て、燐は思わず声を上げた。
「お?前回より上がったぜ!」
絶望的に勉強が出来ない燐の点数が上がったとなれば、それは素晴らしい快挙だ。それを十分に承知している塾生達がおお、とどよめく。が、それは教卓を叩きつける音で直ぐに掻き消された。
「たった二点で喜ぶなっ!」
驚いて見れば、奥村先生こと奥村雪男のこめかみに血管が浮き出ていた。ほんの少しの切っ掛けで、勢い良く血を噴きそうだ。顔色など赤いのを通り越してどす黒く変色してしまっている。オマケに肩が震えている。つまり怒っているのだ。物凄く。流石に燐もおどける気にはならなかった。
「マジで頭割れる…」
「なんや、ヤワいやっちゃな。一時間しか経ってへんぞ」
机に突っ伏した燐を、勝呂竜士が悪魔薬学問題集で頭を小突く。
「やめろぉ〜、今やったヤツこぼれる…」
「アホか。この程度でこぼれるんやったら、覚えてへんのと一緒や!何度でもひたすら書け!書いて覚えろ!覚えたら食え!血反吐吐くまで繰り返すんや!」
「……ドラ○もんの暗記パンくれ…」
「贅沢言ってる暇があったら、一つでも覚えんかい」
半べその燐の頭を、勝呂が更に問題集で叩く。
「まぁまぁ、坊。抑えて抑えて」
「黙っとれ、子猫丸」
「奥村君も難儀やなぁ」
はっはっはと笑いながら、微妙に同情したような志摩廉造を勝呂が睨み付ける。難儀なんは坊やったかな?と慌てて廉造が誤魔化した。
「大体やな、コイツが一緒に勉強してくれぇ、て頼んできたんやで?それが一時間もじっとしてられへん」
正十字学園の本来の男子寮には自習室がある。燐は週末の自由時間をそこで過ごしていた勝呂たちを訪ねたのだ。憤懣やるかたない、と言った体の勝呂は燐を叩くのを中断して、手にしていた問題集を開くと子猫丸と廉造の方へ突き出す。
「見てみぃ。こいつ一時間でたった三問しか進んでへん。そんかわし、あっち見たり、頭掻いたり、貧乏揺すりしたり…、しょっちゅうそわそわしよんねん!こっちの気ィが散るわ」
「いやー、全然判んなくてよー…」
照れたようにえへへ、と笑った燐の顔面に勝呂は問題集を叩きつけた。
「こっちにも勉強があるんじゃ、邪魔すなや!」と勝呂に追い出され

た燐は、あてもなくとぼとぼと歩き出す。雪男のように、一瞬にしてあちこちに行ける便利な鍵を持っていない燐は、何処へ行くにも歩かなければならない。遅い昼の日差しに照らされて、背に負った降魔剣と勉強道具が一際重く感じられる。

「ちぃ、アイツ等と一緒に勉強すりゃぁ早いと思ったのによー」

燐としては二、三週間くらいは何だかんだと一緒に勉強が出来る計算だったのだが、計画はあっさりご破算となった。思惑が外れてつい恨みがましい口調になる。雪男と勉強をしていると、どうも雪男は先生のようになってしまう。ただでさえ雪男には色々追い越されていて気に食わないのだ。それが普段まで上から目線でやられては堪らない。勝呂たちの元を訪ねたのも、同じ塾生ならばそんなこともなかろうと単純に考えた結果だ。

「そうだ、しえみがいるじゃねーか…！」

祓魔屋（フツマヤ）の娘、杜山しえみと勉強をしようと思い立つが、直ぐに勝呂の「オンナとイチャコラしやがって…」と言うイヤミの幻聴が聞こえてきて、勢いも萎んでしまう。

他の面々とも考えたが、常に人形で遊んでいる得体の知れない宝や、携帯ゲームばかりの山田とは話したこともない。燐に何かしらの反応を返してくれる他の塾生達からすると、この二人にはどうにも近寄りがたかった。

「あのまろまゆげもスパルタそうだしよ…」

神木出雲も考えたが、彼女は女子寮だ。女子寮と言う魅惑の施設に興味はあるが、その内の誰か一人を尋ねていくのは恥ずかしい。

かと言って、この正十字学園町内の何処にも適当なあてがなかった。燐は仕方ねぇ、と覚悟を決めて自分と雪男が暮らす旧男子寮に足を向ける。

反省やクヨクヨするのは一日で十分、と言う燐でも、流石に今回は何となく気が引けた。そのせいもあって、今日は何となく顔を合わせ辛かった。勉強が出来ていないのは己のせいだ。だから雪男を避けるせめてもの言い訳に、勉強してくると言って出てきたのだ。

「……ただいま…」

そっと部屋の扉を開けた燐は、おそるおそる部屋を覗き込む。もう一人の部屋の主、雪男の姿があるかと思ったが予想に反して部屋は無人だった。

「なんだ、アイツ出掛けてんのか。って、あ！祓魔の依頼か⁉」

洋服掛けにかかっているはずの制服と祓魔師（エクソシスト）のコートが無くなっていた。

「ちっ、出遅れたぜ」

候補生（エクスワイア）に昇格したとは言え、日が浅くてまだ実戦の手伝いにも呼ばれていない。だが燐は訓練生（ペイジ）の頃から雪男に無理を言って、祓魔の現場に連れて行って貰っていた。それが燐の楽しみでもあり、モチベーションを保つイベントでもあった。

荷物を放り出して勢いよく寝台に倒れ込む。と、がさりと何かが背中で音を立てた。

「何だ？」

布団の上に雪男の字で「森林区域南地区17時半」と書いたメモがあった。祓魔依頼の予定かと思い当たる。慌てて時計を確かめると、四時半を回った所だ。森林区域は初めて行く所だが、急げば祓魔の現場に

間に合うかも知れなかった。燐は降魔剣を手に取ると部屋を走り出た。

森林区域の最寄り駅で降りると、駅前の周辺地図で南地区の位置を確かめる。なんだかまだ眠いのは、電車の中で中途半端に居眠りしたせいだ。欠伸をしながら目を擦る。時刻を確かめると五時を回った所だった。南地区は最寄り駅からはやや遠い。広大な森林区域の周辺道路を回るか、森林区域を真っ直ぐ突っ切って行かなければならない。どちらにしても相当な距離がある。燐は少し迷った挙句、真っ直ぐ突っ切ることに決めて、一つ深呼吸をすると走り出す。何にしても回りくどいことは苦手だ。

陽が傾いて、少し薄暗くなった木立に囲まれた南地区に入り込んだ途端、燐はつまずいた。下生えに顔から派手に突っ込む。いってぇ、と起き上がる前に軽く腰を蹴り飛ばされ、更に均衡を崩して無様に転んでしまう。体勢を整える前に、背負っていた降魔剣が引っ手繰られた。

「誰だ！」

「五分遅刻だよ、兄さん」

「雪男？」

「良かった、来てくれて。あのメモをちゃんと見つけてくれるか心配だったんだ」

雪男が降魔剣を持ったまま微笑む。きっちり制服を着て、雪男は夏仕様の祓魔師のコートの出で立ちだ。

「あ…、いやそりゃ良いけどよ。てか、剣…」

返せよ、と言う訴えを無視して、雪男はメガネのフレームを親指で押し上げると、一転意地悪な笑みを浮かべる。

「さ、じゃぁ始めようか」

「へ？」

「へ、じゃない。特訓だよ。兄さんのために考えたんだ」

ほら、と雪男が白い風船を差し出す。

「なんだそれ？」

「この水風船にはC濃度の聖水が入ってる。森林区域ってのは下級悪魔の住処（すみか）でね」

雪男は手にした一つを地面に叩きつける。水風船は簡単に割れて、衝撃で中の液体が四方に飛び散った。

「こうやって投げつければそいつ等位は退けられる。好きに取れるように上にも用意しといた」

雪男が木立の上を指差す。燐の倍以上もあろうかと言う高さの枝から、無数にも思える数の水風船が下がっている。薄暗くなった木立の中で、白い提灯のようにぼんやりと浮き上がった。

「ナニしようってんだ、オマエ」

「だから特訓だよ、兄さん」

燐が頭を悩ませている間に、木立の中は段々と薄暗くなっていく。白い水風船が暗い木立の中で淡く光を放つように浮かび上がった。

「ルールは簡単。僕の質問に答えられたらこの水風船を一個あげる。或いは上のを取ればいい。兄さんなら簡単だろ？取ったらその水風船を投げつけて下級悪魔を祓う。ただし、特訓の間は、サタンの炎を使うのはナシ。この降魔剣もナシ」

雪男が何をさせたいのか、さっぱり判らなかった。質問で水風船？

「兄さんは実戦派なんだろ？身体を動かしながら、祓魔が出来て勉強も覚えられるなんて、一石三鳥じゃないか」
感謝しろ、と言わんばかりの雪男の言い草が気に食わない。
「ぐじゃぐじゃとワケのわかんねーこと言ってんな、このホクロメガネ」
勉強しながら実戦だと？実戦は実戦だ。降魔剣を抜いてサタンの力でねじ伏せれば、直ぐに終わりだ。
「早くしないと、下級悪魔が一杯出てきちゃうよ」
雪男の言葉が聞こえたかのように、蛾がわんさと出てくる。金属を擦り合わせたような甲高い耳障りな鳴き声をあげて、燐に襲い掛かってくる。
「うわっ！こいつら噛み付いてくるぞ！」
「虫(チュー)は吸血性だからね」
銃から弾丸が打ち出される轟音が響く。あまりに耳に近かったせいで、燐の鼓膜が一瞬痺れて聞こえなくなった。燐に噛み付いていた蛾の群れがぱっと散る。視界の開けた燐の正面に雪男が立って居た。燐の顔のほんの直ぐ近くで構えた銃口がまだ硝煙を上げている。その迫力に、思わず数歩後ずさった。
「あ…っぶね！近けーんだよ！」
「僕は問題を出しつつ、上の水風船を撃って兄さんの邪魔が出来る」
「バカヤロウ！オレに当たったらどうすんだよ！」
「勿論、その可能性もあるね。なんせ動いてる最中のことだ」
銃を構えたままの雪男の口調は、まるで感情がないかのようだ。メガネのレンズが残照を照り返して余計に表情が読めなかった。
「とか言って、ホントは当てるつもりじゃねーのかよ」
「さてね。どっちでしょう」
雪男がなに言ってるんだよ、と言ってくれることを期待した、ほんの冗談のつもりだったのだ。だがその期待はあっさりと破られる。メガネを押し上げながらにやりと笑う雪男に、燐は腹が立って仕方がなかった。アニキに銃を向けるとは何事か。そもそも何のつもりで、こんなことをしようとするのか。
「ふざけんな！」
「ふざけてるのは兄さんだ。いつまで勉強は苦手とか言って逃げてるつもり。祓魔師(エクソシスト)になるって言ったのは誰だよ」
雪男に襲いかかろうとする下級悪魔を撃ち落としながら、雪男の顔が厳しくなる。
「兄さんはサタンを倒すんだろ。兄さんのその炎と力だけで、サタンが倒せる確証は？」
「……き、気合いでぶちのめす！」
「へぇ、そう。それが万が一サタンに効かなかったら？仮にもサタンの炎だ。サタンに傷一つつけられない可能性だってある」
「…でも、ゴブリンとか、しえみン時とかは倒したじゃねーかよ」
「それは単に兄さんの力の方が強かっただけかもしれないだろ。一体どの位強いのか、どの位の悪魔にまで通じるのか、誰も知らないよね。兄さんには降魔剣と炎と、バカみたいな怪力しかない。じゃぁ、そのどれもサタンの力に敵わなかったら？兄さんの覚悟は、やっぱり勝てませんでした、で済んでしまうようないい加減なものだったの？」
正論過ぎて更に腹が立つが、言い返せない。いつもは「もっと頭を